鉄砲洲神社詩吟　素読論語解説
（平成 27 年 9 月 4 日）

【四二】子　磬を衛に撃つ。蕢を荷いて孔子の門を過ぐる者有り。曰く、心有るかな、磬を撃つことやと。既にして曰く、鄙なるかな、硜硜乎たり。己を知ること莫くんば、斯れ已まんのみ。深ければ則ち厲し、浅ければ則ち揭すと。子曰く、果なるかな、之を難しとすること未しと。

「磬」は石などで出来た打楽器です。**「蕢」**はもっこです。

孔子が衛という国で楽器を一日中鳴らして癒していた。孔子の家の前をもっこを担いで通り過ぎる者は、隠者です。その隠者が言うには、「ここの主人の楽器の響きが良くない。世の中に出たいと言っているような楽器の弾き方だ」しばらくして、「まだ世に出たいという。自分が世の中に受け入れられないのだったら、止めればよい。恥ずかしいと思いなさい。川を渡るときに深いと思ったら、衣を脱いで裸になって入ればよい。歩ければ歩くと良いし、歩けなければ泳げば良い。浅い時は、裾をめくって、腰にでも巻いて下半身だけ水につけて歩けるなら、歩ければよい」孔子は「世を捨てた人間は思いきりが良い。私は天が与えた使命を果たすまで死ねない。そういう点から考えれば、思いきって諦めるのは簡単なことだ。私は難しいことにチャレンジしている」という話です。

「硜硜乎たり」は、まだ硬い、心の中が柔らかくなっていない頑固者という視点で孔子を批評しています。

これは詩経です。相手と問答する時、批評する時に詩経の中の科白を使って、相手に自分の意思を伝える。それだけ教養があるということでしょう。教養人は、きれいさっぱりと世の中を捨てているが、貴方はいつまでも欲望を捨てないのかといっています。

私は「三島中洲」を執筆中ですので色々と調べていますが、幕末から明治の頃は公用語が漢文でした。三島中洲は備中松山藩・山田方谷の片腕として藩政改革を進めていった人物です。幕末の頃の志士は、あちこち行ったり来たりする。蛇足ですが、吉田松陰が初めて三島中洲に会った時には、漢文でいろいろ書いて見せて批評しあう。お互いに漢文で書いたものを見せあって批評して、自分の考え方を相手に伝えるというスタイルになっていました。江戸弁、薩摩弁、東北弁は伝わらない。お互いが色々な地域から来るが、何を話しているのか分からないので、みんな漢文でサラッと書いてみせる。筆談をしていたみたいです。筆談をするので意思が通じ合う。明治時代の志士で教養がある人は、漢文で筆談ができる人達ということが、教養ありなしの判断材料のようでした。